井上良夫宛江戸川乱歩書簡

〈解題〉

平成二十五年秋、大衆文化研究センターは、井上良夫ご遺族より江戸川乱歩書簡の寄贈を受けた。井上良夫に宛てた書簡と、井上没後に遺族へあてた書簡、あわせて二十数通である。

乱歩によれば、乱歩と井上の文通は昭和十年ごろに始まって、昭和十八年に最も頻繁になり、その後、戦争の激化により止まった。井上は昭和二十年の四月二十五日に亡くなったが、乱歩がそれを知るのは二十一年のことである。井上は海外探偵小説に詳しく、この数年間の文通によって、乱歩は多くの知識を得たのだった。

昭和二十六年に刊行された江戸川乱歩の評論集『幻影城』は、井上に捧げられている。「この書を井上良夫君の霊前にささぐ」「若し君が生きていたら、誰よりも熱心にこの本を読み、且つ批判してくれるだろうと思う。十余年前、英米探偵小説の読後感や探偵小説本質論について、非常識なほど長い手紙のやりとりをつづけた、あの頃の楽しい思出から、私はそう信じている。だから、私はこの書を先ず君に贈りたいのである。」乱歩は冒頭にこの文をかかげ、井上をしのんだ。

乱歩は井上のことを同人雑誌「新探偵小説」に「名古屋・井上良夫・探偵小説」として書いている。さらに、『探偵小説四十年』の昭和十八・九年「井上良夫との文通」でもその文章を引用して、井上との交流と彼の業績を紹介している。

井上の父は鳥羽の造船所に勤めており、若き日の乱歩もそこに勤務していた時期があった。そのため家族とは面識があったようだが、井上良夫が探偵小説の翻訳者として活動するようになったころから書簡によって交流するようになる。

井上良夫が翻訳紹介したのは、クロフツやフィルポッツといった、当時新しく台頭してきた作家だった。それ以外にはスカーレット、ブッシュ、ロスを乱歩は挙げて、これらの作家を日本に初めて紹介した功績を高く評価している。

井上の評論は探偵小説雑誌「ぷろふいる」「探偵春秋」な

どで発表されたが、それらが一冊の本として刊行されることはなかった。『探偵小説のプロフィル』としてまとめられたのは、ようやく平成六年になってのことである。この本の解説で山前譲も述べているように、乱歩没後は井上良夫の名はほとんど知られることはなくなってしまったのだった。

井上良夫に宛てた乱歩の書簡については、すでにいくつか公開されている。昭和二十六年から二十九年にかけて、探偵小説雑誌「黄色の部屋」で中島河太郎によって紹介されたものなどが、講談社江戸川乱歩推理文庫第64巻「書簡対談　座談」にも収められている。これらの書簡は、江戸川乱歩が所持していた井上良夫からの書簡と、乱歩自身が控えていた書簡の写しなどから抽出したものである。

今回寄贈された書簡は、それらを補う資料ということになる。

今回紹介するのは、井上良夫に宛てた、乱歩からの長文の書簡のうち、昭和十四年九月三十日付（消印十月一日）書簡である。

封筒の裏には、井上の字だと思われるが、「「ギルト」と To Wake the Dead との読後感」と赤字で書かれている。

「ギルト」というのはフォーマン（Henry James Forman）の「Guilt」（一九二四）のことである。これはヴァン・ダインが「世界探偵小説傑作集」の序文で評価した作品であるということで、乱歩も期待したようだが、実際読んだところあまり高い評価ではなかった。この作品については、乱歩は「宝石」昭和二十一年十二月号「幻影城通信」で詳しく紹介し、この文章を「類別トリック集成」に心理探偵小説の例として加えている。

「To Wake the Dead」はジョン・ディクスン・カーの小説で、ハヤカワ・ミステリから延原謙の訳で『死人を起す』（一九五五）、創元推理文庫から橋本福夫訳『死者はよみがえる』（一九七二）として刊行されている。

南アフリカの作家の青年が、ロンドンのホテルで殺人事件に巻き込まれる。名探偵キデオン・フェル博士が、そのホテルでの殺人と、それと関連した田舎の屋敷での事件とを解決する話である。

書簡で乱歩は、この作品をチェスタトンと結びつけている。この作品に登場する重要なトリックが、チェスタトンがブラウン神父の小説であつかったものと近いものとなっているのである。カーがチェスタトンと似ているという評

価は、乱歩の戦後の文章でも書かれている。

乱歩にとって、カーは最も高い評価の作家のひとりと言って良く、数多くの評論を書いている。『随筆探偵小説』に収められたものだけでも、いくつもの評論でカーを紹介している。「カー覚書」「密室殺人の作家」「グルーサムとセンジュアリティ」など、いずれも昭和二十一年に書かれたものである。戦後に紹介すべき作家として、カーが重要な存在であったことが、これによってもわかる。

これらのまとめでもあり、また、乱歩がカーについて書いたもっとも有名なものでもあるのは、『続・幻影城』の「J・D・カー問答」である。これは別冊宝石の「カー傑作集」（昭和二十五年八月）のために書かれたものである。この中で乱歩は、カーの作品に順位をつけている。第一位のグループとして、「The Mad Hatter Mystery.」（帽子収集狂事件）、「The Plague Court Murders.」（黒死荘の殺人）、「The Emperor's Snuff Box.」（皇帝のかぎ煙草入れ）、「To Wake the Dead.」、「The Judas Window.」（ユダの窓）、「The Red Widow Murders.」（赤後家の殺人）の六作品を挙げている。「To Wake the Dead.」は、こういったカーの傑作のひとつとして位置づけられたのである。

江戸川乱歩は、戦中にはほとんど作品を発表出来ない状況にあったが、戦後すぐに再出発をする。小説作品は少なかったが、評論を次々と書き、その成果は『随筆探偵小説』『幻影城』『続幻影城』といった単行本にまとめられていった。

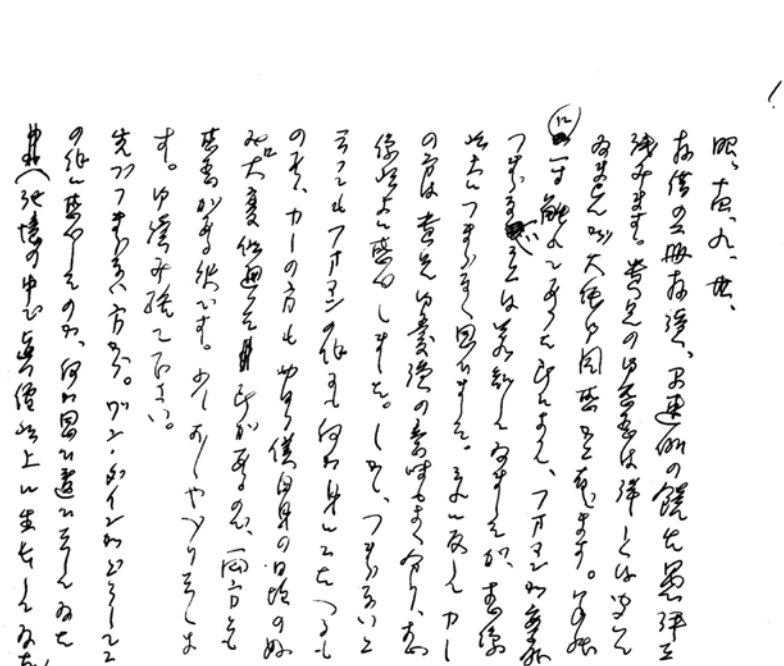
こういった著書に収められた文章のなかで、戦後にさまざまな探偵小説に触れたことを書いているため、乱歩の海外探偵小説受容は、戦後に集中的に行われたと考えられやすい。実際、多くの書物をこの時期に収集してもいるので、この印象もあながち的外れではない。しかし、井上との交流からも明らかなように、昭和十三年、十四年といった時期にもすでに、海外探偵小説の有名作品に触れ、かつ、深く読み込んでいたことがわかるのである。

この書簡は、このような、比較的早い時期からの乱歩の海外探偵小説受容を知る上でも重要なものだと言えるだろう。

寄贈された資料にはほかに、井上良夫没後に遺族に宛てた書簡などもあり、これは乱歩が戦後、井上良夫の翻訳書の刊行に尽力したことがわかる資料となっている。これらの資料も今後この「大衆文化」などで紹介していきたいと

考えている。

落合教幸
（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター学術調査員）

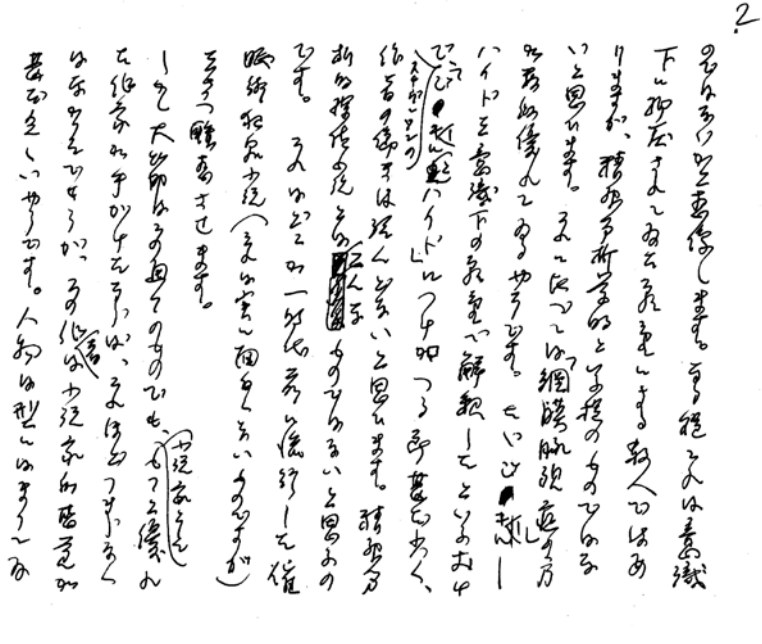


昭、十四、九、卅、

拝借の二冊拝読、早速例の饒舌愚評を試みます。貴兄の御感想は詳しくは聞いてゐませんが大体御同感かと存じます。御手紙に■一寸触れてあつた所によつて、フオマンが案外つまらな〔い〕ことは承知してゐましたが、想像以上につまらなく思ひました。それに反してカーの方は貴兄御愛読の意味もよく分り、想像以上に感心しました。しかし、つまらないと云つてもフオマンの作にも何か身にこたへるものあり、カーの方もやはり僕自身の日頃の好みに大変似通つた■所があるので、両方とも感想がある訳です。少しおしゃべり致します。御読み捨て下さい。

先づつまらない方から。ヴン・ダインがどうしてこの作に感心したのか、何か思ひ違ひをしてゐた〔のか〕(記憶の中で眞價以上に生長してゐた)のでないかと想像します。なる程これは意識下に抑圧されてゐた願望による殺人ではありますが、精神分析学的といふ程のものではないと思ひます。これと比べては「網膜脉視症」の方が数段優れてゐるやうです。たゞジ■キ〔ー〕ル—ハイドを意識下の願望で

〔 〕消してある部分　〔 〕挿入部分
■ ぬりつぶしてある文字　□ 判読できなかった文字



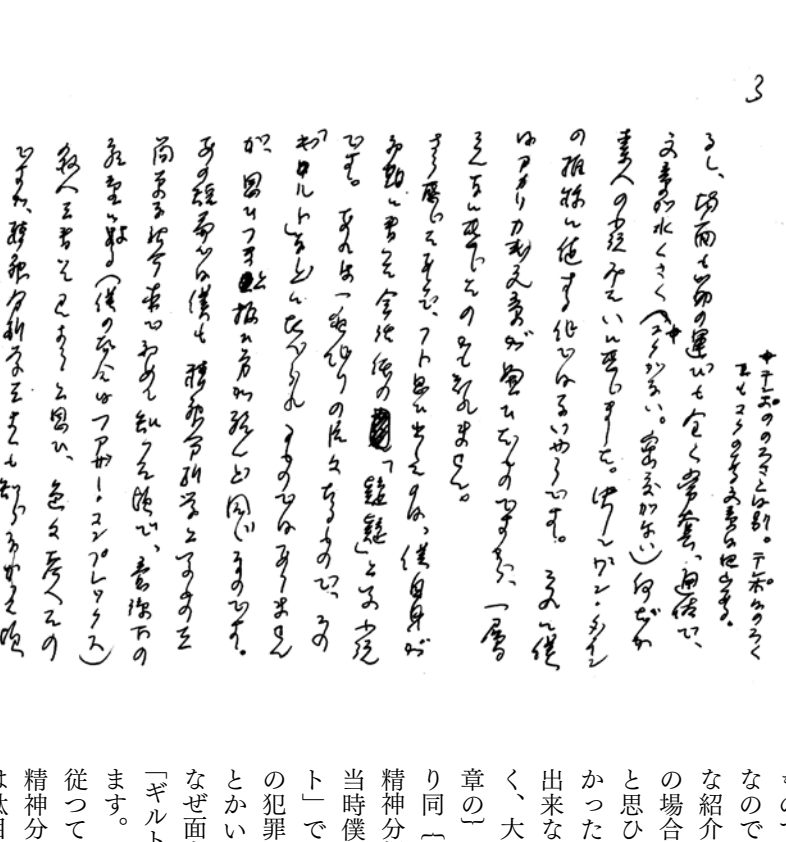
解釈したといふ丈けで、〔スチヴンソンの〕「ジ■キ〔ー〕ル〔と〕ハイド」につけ加へる所甚だ少く、作者の働きは殆んどないと思ひます。精神分析的探偵小説とは■■■〔こんな〕ものではないと思ふのです。これはどこか一時代前に流行した催眠術犯罪小説（それは実に面白くないものですが）をさへ聯想させます。

しかし大筋はこの通りのものでも、〔小説家として〕もっと優れた作家が手がけたならば、これほどつまらなくはなかったでせうが、この作〔者〕は小説家的感覚が甚だ乏しいやうです。人物は型にはまってゐるし、場面も筋の運びも全く常套、通俗で、文章が水くさく（コクがない。密度がない）

※テンポののろさとは別。テンポはのろくてもコクのある文章は澤山ある

何だか素人の小説みたいに感じました。決してヴン・ダインの推称に値する作ではないやうです。それと僕はアメリカ式文章が嫌ひだものですから、一層そんなに感じたのかも知れません。

さう感じたあとで、フト思ひ出したのは、僕自身が初期に書いた会話体の■「疑疑（ママ）」といふ小説です。あれは一夜作りの片々たるもので、この「ギ■ルト」などに比べられる

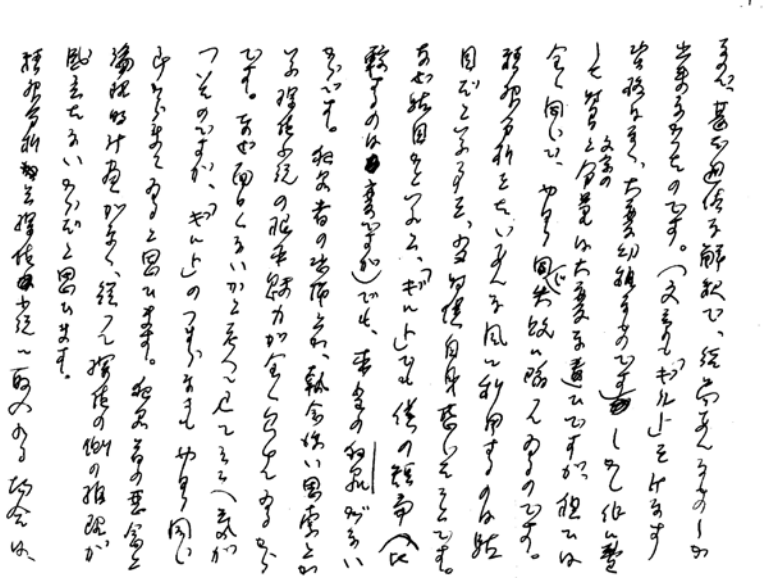


ものではありませんが、思ひつき■と扱ひ方が殆んど同じなのです。あの短篇では僕も精神分析学といふものを簡単な紹介本で初めて知つた頃で、意識下の願望に■よる（僕の場合はフアザー・コンプレックス）殺人を書いて見ようと思ひ、色々考へたのですが、精神分析学をよくも知らなかった頃なので、甚だ通俗な解釈で、結局あんなものしか出来なかつたのです。（文章も「ギルト」をけなす資格はなく、大変幼稚なものです）■しかし作に費した時間と〔文章の〕分量は大変な違ひですが、狙ひは全く同じで、やはり同〔じ〕失敗に陥ってゐるのです。

精神分析をたゞあんな風に利用するのは駄目だといふ事を、当時僕自身感じたことです。なぜ駄目かといふと、「ギルト」でも僕の短篇（比較するのは■変ですが）でも、本当の犯罪がないからです。犯罪者の恐怖とか、執念深い思索とかいふ探偵小説の根本魅力が全く欠けてゐるからです。なぜ面白くないかと考へて見てそこへ気がついたのですが、「ギルト」のつまらなさもやはり同じ所から来てゐると思ひます。犯罪者の悪念と論理的計畫がなく、

従つて探偵の例の推理が際立たないからだと思ひます。

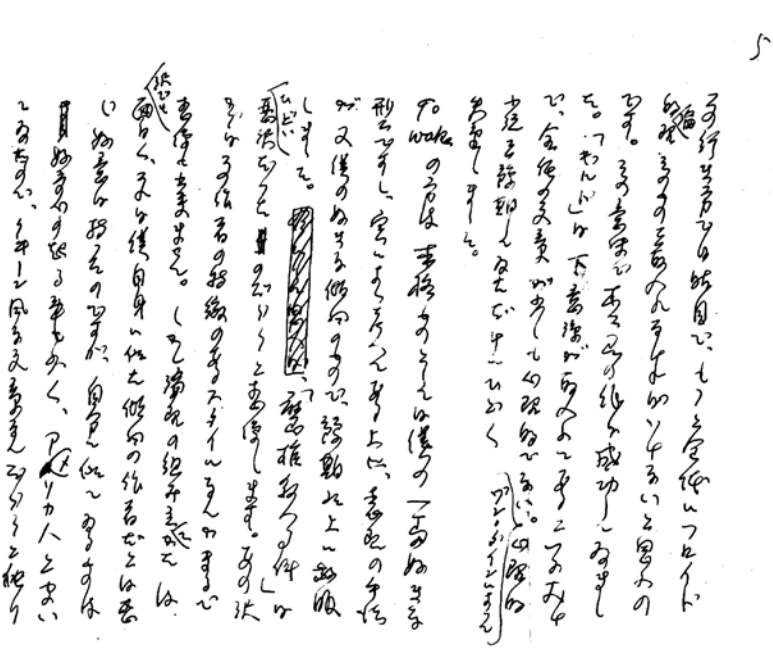
精神分析■を探偵■小説に取入れる場合は、この行き方では駄目で、もつと全体にフロイド的論理そのものを取入れ



なければいけないと思ふのです。その意味で木々君の作は成功してゐました。「ギルト」は下意識が取入れてあるといふ丈けで、全体の文章が少しも心理的でない。〔ヴン・ダインによって〕心理的小説を豫期してゐただけにひどく失望しました。

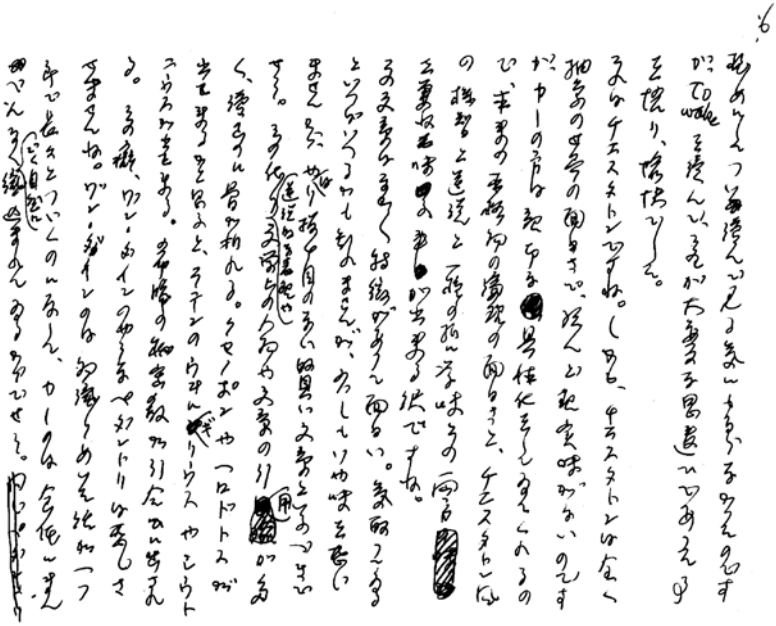
To wake の方は本格ものとしては僕の一番好きな型ですし、実によく考へてある上に、表現の手法が又僕の好きな傾向のもので、豫期以上に敬服しました。■■■■「魔棺殺人事件」はひどい悪訳だった■のだらうと想像します。あの訳からはこの作者の特徴のあるスタイルなんかまるで想像も出来ません。しかし論理の組み立〔て〕かたは〔訳でも〕面白く、これは僕自身に似た傾向の作者だとは感じ好意は持ったのですが、自分と似てゐるものは■好奇心の起る事も少く、アメリカ人と聞いてゐたので、クヰーン風な文章なんだらうと独り極めにしてつい■讀んで見る気にもならなかったのですが、To wake を読んで、それが大変な思違ひであった事を悟り、愉快でした。

これはチェスタトンですね。しかも、チェスタトンは全く抽象の世界の面白さで、殆んど現実味がないのですが、カー



の方は親切な■具体化をしてゐてくれるので、本来の本格物の論理の面白さと、チェスタトン風の機智と逆説と一種の哲学味との両方■■を〔兼ね〕味ふ事■が出来る訳ですね。

この文章はなか〳〵特徴があって面白い。気取ってゐるといへばいへるかも知れませんが、少しもいや味を感じませんから、や〔は〕り抜け目のない賢い文章といふべきでせう。その代り〔逆説的な表現や〕文学上の人物や文章の引用が多く、讀むのに骨が折れる。クセノポンやヘロドトスが出て来るかと思ふと、ラテンのウヰルギリウスやシウトニウスが出て来る。希臘の秘密教が引合ひに出される。その癖、ヴン・ダインのやうなペダントリは感じさせませんね。ヴン・ダインのは物識りめいた話が一つ所で長々とつゞくのに反して、カーのは全体にまんべんなく〔ごく自然に〕織込まれてゐるからでせう。〔同じペダントリ〕フィルポッツ風のリズムのある流れるやうな名文もいゝですが、やはり古い感じがする。カーのはさういふ古さがなく、智識的な気取りのあるいゝ文章だと思ひます。僕はチェスタトンを原文で讀んでゐないのでよく分らないが、文章も似てゐるのぢやありませんか。フィルポッツの方は僕にも〔いく



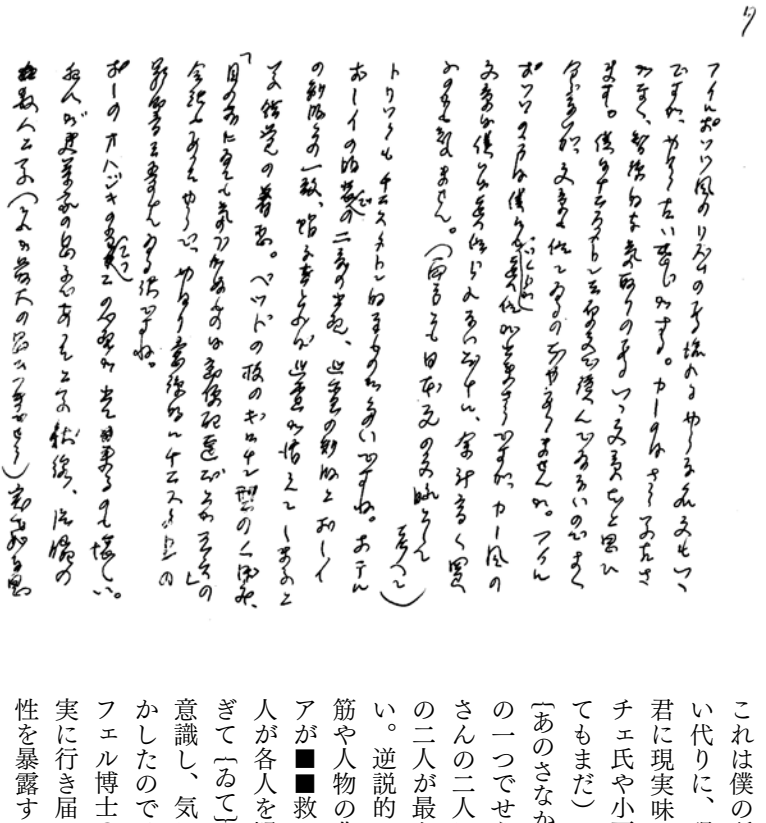
らか」眞似が出来さうですが、カー風の文章は僕には真似られないだけに、余計高く買ふのかも知れません。（両方とも日本文の文脈として考へて）

トリックもチェスタトン的なものが多いですね。ホテルボーイの服装〔で〕の二度の出現、巡査の制服とボーイの制服との一致、帽子をとれば巡査が消えてしまふといふ錯覚の着想。ベッドの板のギロチン型のくぼみ、「目の前にゐても気づかぬものは郵便配達だとか云々」

の会話もあったやうで、やはり意識的にチェスタトンの影響を受けてゐる訳ですね。

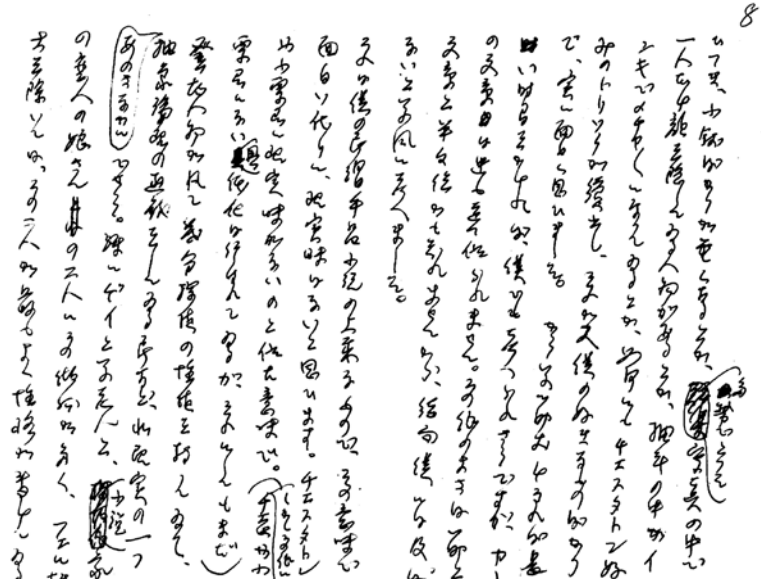
ポーのオハジキの当〔てっ〕この心理が出て■来るのも懐しい。

犯人が建築家の息子であったといふ伏線、片腕の■殺人といふ（これが最大の思ひつきでせう）突飛な思ひつき、小銭ばかりが重くなるとか、多勢でとった写真の中で一人だけ顔を隠してゐる人物があるとか、抽斗の中がインキでメチヤくになってゐるとか、如何にもチェスタトン好みのトリックが続出し、それが又僕の好きなものばかりで、実に面白く思ひました。かういふ筋丈けなれば長い時間をかければ、僕でも考えられさうですが、カーの文章は迚も眞似られません。この作のよさは筋と文章と半々位かも知れ



ませんから、結局僕には及ばないといふ風に考へました。これは僕の所謂手品小説の上乗なもので、その意味で面白い代りに、現実味はないと思ひます。チェスタトンや小栗君に現実味がないのと似た意味で。（〔しかしこの作には〕チェ氏や小栗君にない具体化は行はれてゐるが、それにしてもまだ）登場人物が凡て幾分探偵の性質を持ってゐて、〔あのさなかに〕抽象論理の遊戯をしてゐる所など、非現実の一つでせう。殊にゲイといふ老人と、小説家の恋人の娘さんの二人にこの傾向が多く、フェル博士を除いては、この二人が最もよく性格が書けてゐるし、言動がなかく面白い。逆説的で、どこか哲学的といふやうな所があっ■て。筋や人物の非現実性を、作者の巧みな機智や逆説やユーモアが■■救ってゐるともいへるでせう。しかし、最後の各人が各人を疑ひ合ってゐた告白のセリフは、少しふざけすぎて〔ゐて〕、無くもがなのやうです。作者が筋の非現実を意識し、気にしてゐる為に、あんな幕〔切〕れにしてごまかしたのではないかと邪推さへします。

フェル博士の種明かしの説明の部分は大変気に入りました。実に行き届いてゐて（行届けば行届くほど、却って非現実性を暴露する結果になるのではあるが）僕の物の考え方と似てゐて会心でした。この作は全く論理的な遊戯ですね。



■■（可なり上級の）■

読後他の作家と比べて見ましたが、ヴン・ダインの「僧正殺人事件」より少し面白味が劣るやうです。あれ程大きな中心魅力がないのと、気■魄というやうなものが、ヴン・ダイン程に十分でない感じ。又小さなトリックを無数に組合せてあるが、その一つくを取出して見ると、本当に創意のあるトリックが余りない。といふやうな■事かと思ひます。

「赤毛のレドメイン」を思ひ出して見ると、〔やはり〕これにはあれ程の魅力がありません。フィルポッツの魅力は特殊のもので、いつかも御手紙した日本の涙香などに共通した悪人が本当に書けるといふ所から来る魅力ですが■、カーの〔に〕はさういふものは殆んどなく、たゞ論理遊戯、〔上級〕手品の面白さだけだからだと思ひます。チェスタトンのブラウン物を長篇にするとかういふものが出来るのではないかと考へました。長いだけに■非現実が目立つ弱点があるが（抽象〔的表現〕でごまかし切れない）しかし十分面白く、文体の面白さを考へに入れれば、ベスト・テンの一つに入れられるのではないかと考へます。例へば「Yの悲劇」に比べて見ると、面白さは殆んど同じ位〔To wakaの方がやや優れて〕これは是非翻訳したいものですね。こ

9

し、全部がすべく面白い。逆説的でもあって然しまた幻と云ふやうな所があって[redacted]て。如何にも人間の心の現実性で、作者の巧みな機智的逆説やユーモアが[redacted]描くことはいつまでもである。しかし、最後の老人が老人を殺すに会ってねん告白のセリフは、少しふざけすぎて(あとで)無くもがなのやうです。作者が前の心理 実生活しっかりあるのです。あくまで技巧やらにも、もう少し欲しいのですが(を)推さへします。

それ故其の終りの説明の部分は大変あっさりしてしまひ、突然行き届いて(行届かぬ所も)ほぼ却つて心理実性を異常に暴露する結果になるのではないですか(僕の知るかぎり)僕の好の考へ方に依って言へば少し不合理な論理的趣味ですね。[redacted](可成)

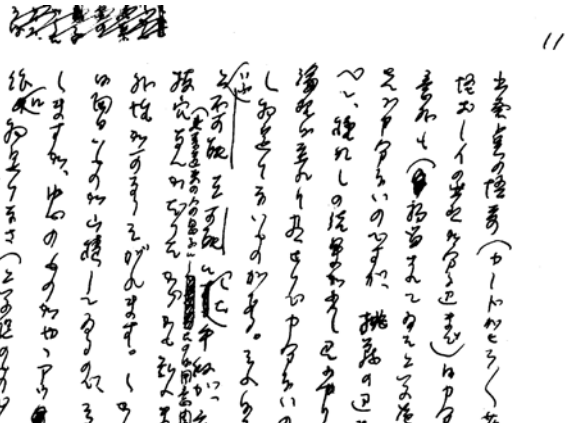
ちょっと余談の[redacted]

誤解の作家に比べて見ますと、ヴァン・ダインの「僧正殺人事件」なども面白味がありますが、あの様な作家の総力がないのに、[redacted]然し縁とするやう

10

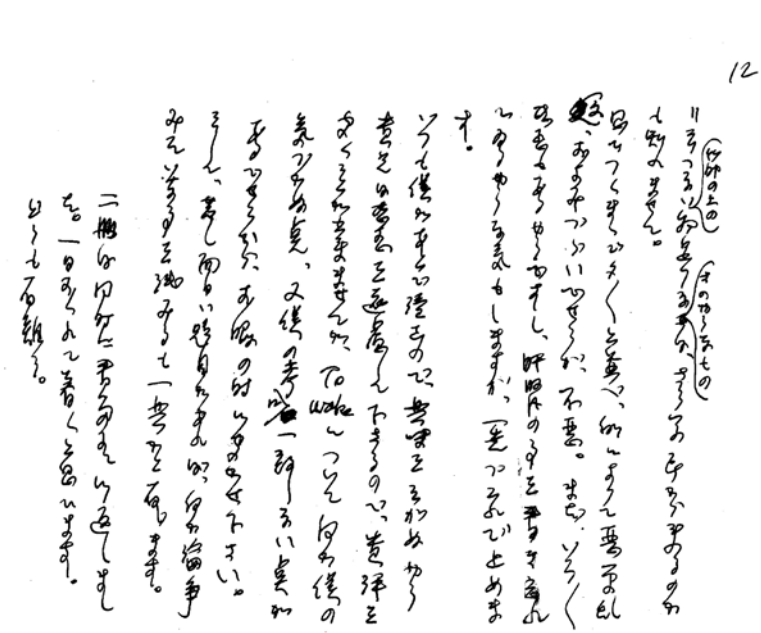
なるのが、ヴァン・ダインで様々十分ではないのです。又カキネトリックを無数に組合せてあるが、その一つ一つを面白しく見ると、非常に創意のあるトリックがないのではないかとさへ思ひます。「グリーン家殺人事件」を思ひ出しますと、(かなり)そのあれ程の魅力がありません。ファイロ・ヴァンスの魅力ある推理のやうなのですが、それは作者の流儀であって芸術的な恐怖を作る魅力のあるトリックが出てきます。しかし結局はの面白さで、それが大変な(退屈)心理趣味の面白さだと思ひます。

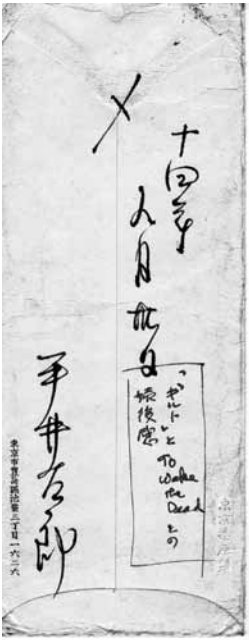
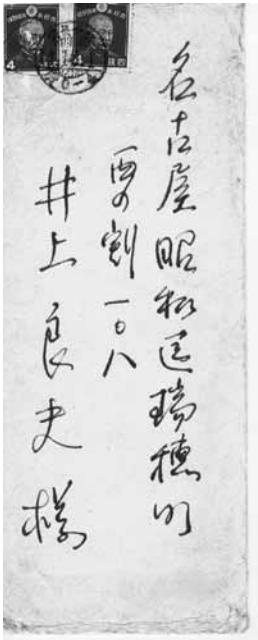
チェスタトンのブラウン神父を長命にするためにもう少し考へてあります。長いかも(面白さで)実は心理実が同じ様な結果がある(神父なる作品)てなるでせう。(かり)して十分面白い、又僕の面白さでなく、「ベストテン」の一つになるのではないかと考へます。(僕の好みの傑作に出会ふと、面白さは格別)又それは幾分して居るのですね。又、幾分あるかも、みやうなんだと思ひます、前置のない説で来いとするいと思ひます(逆説的な)文体が面白いのですが。



れは出来る丈け原文に忠実に、省略のない訳でないといけないと思ひます。〔逆説的な〕文体が面白いのだから。

出発点の怪奇（カードがヒラ〳〵落ちて来る所から、怪ボーイの出現が分る辺まで）は申分なく、結末の意外も（■拘留されてゐたといふ強いアリバイにて）先づ申分ないのですが、挑戦の辺までの面白さに比べて、種明しの結果が少し見劣りがする。遊戯的論理は至れり盡せりで申分ないのだが、何だか少し物足りないものがある。それは多分、拘留中と〔いふ〕不可能を可能に〔した〕手段が、案外つまらない（建築道楽の人の息子にしたのは用意周到なれど）抜穴なんかだったからかも知れません。これで意外性がかなりそがれます。しかし、その他のトリックは面白いものが山積してゐるので、その方で救はれはしますが、中心のものがやゝアッ■ケない。■この作〔に〕物足りなさ（といふ程のものではないが）があるすれば〔出発の怪奇も、結末の意外もひっくるめて全体に〕中心的な大きな手品が案外なくて、小さい手品を無数に寄せ集めて、それに替えたといふ点にあるかと思ひます。〔筋の〕複雑は一方では魅力ですが、よく考へて見ると、中心的な創意のないのを救ふ為の手段として■複雑にされたとすれば、■■■ハッキリ云へない〔筋の上の〕物足りな〔さのやうなもの〕は、



12

さういふ所から来るのかも知れません。
思ひつくままゴタ〳〵と並べ、例によって悪筆乱文、およみづらいでせうが、不悪。まだ、いろ〳〵感想もあるやうですし、肝腎の事を書き忘れてゐるやうな気もしますが、一先づこれで止めます。
いつも僕があとで読むので、興味をそがぬやう貴兄は感想を遠慮して下さるので、貴評を聞くことが出来ませんが、To wake について何か僕の気づかぬ点、又僕の考〔に〕一致しない点があるでせうから、お暇の時に聞かせ下さい。
そして、若し面白い題目があれば、何か論争みたいな事を試みるも一興かと存じます。
二冊は同時に書留にて御返しました。一日おくれて着くと思ひます。
どうも有難う。